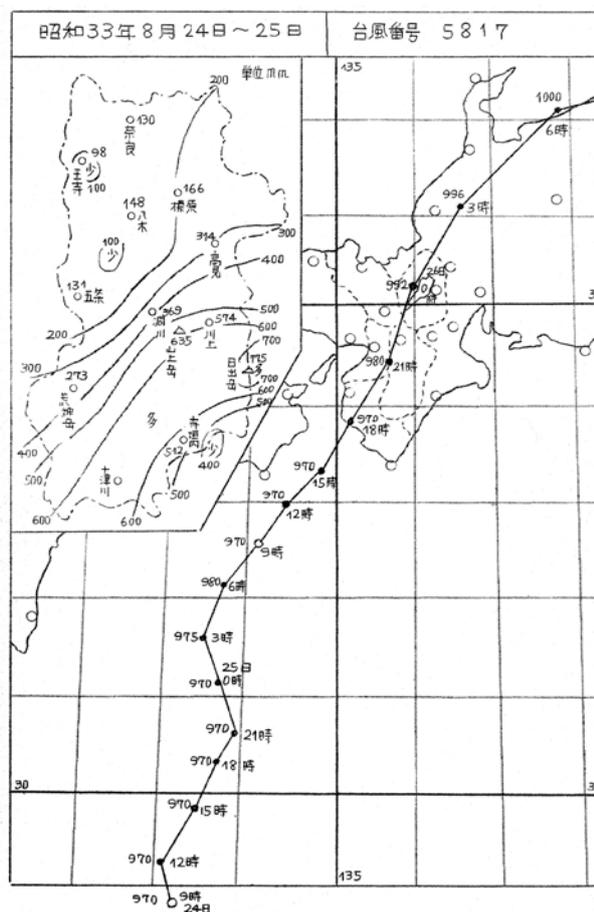


県北部は強風が吹き続き、 それに豪雨が加わった南部地域

台風が中心が奈良市内付近を通過し、県の東部から南部にかけて大雨となりました。死者、行方不明などの人的被害に加え、農耕地への被害、建物の流失、倒壊など被害総額は約10億円に上るという試算が出されました。

1. 台風の進路

8月21日午後3時ごろ、沖ノ鳥島付近の熱帯低気圧が台風となり北北西に進んでいましたが、南大東島東方の洋上で北に進路を変更。24日朝には四国の南500キロメートルにまで接近してきました。そこで進路を北北東に変え、25日午後5時30分に和歌山県の白浜と御坊の間より上陸、そのときの中心気圧は970ヘクトパスカル、中心付近の最大風速は50メートル/秒でした。進路を北北東に取ったまま、午後8時に高野山を通過し奈良市の西方を通り京都付近を経て、勢いを弱めながらも北陸地方から関東北部を通り、仙台付近から太平洋へと去っていきました。



台風進路図と県内降水量分布図

(『奈良県に大被害を与えた主要台風の解説』より)

2. 県内の天候の推移

台風は奈良県を斜めに横断するように通過しました。まともに台風の直撃を受けることになる奈良県では、24日朝から南部で雨が降り始め、午後からはそれが県全域に広がりました。奈良地方気象台は8月25日午後3時40分に暴風雨警報を発表。25日午後5時ごろより雨が強くなり始め、午後7時30分には洪水注

期間8月24日～25日		
地 点	総降水量 (mm)	日最大降水量 (mm)
八 木	147.6	102
大宇陀	200.1	121.4
王 寺	114.5	70.7
曾 爾	286.3	207.9
五 條	94.3	58.8
山上岳	636	412
河 合	672.6	413
荒神岳	318.5	176.5
玉置山	505.7	303.1
日出岳	780	474

主な地点の降水量（『奈良県の台風40年』より）

意報も発表されました。台風は午後10時ごろに三重県境に到達し、その間の奈良地方気象台での観測記録によると、総降水量129.3ミリ、日最大降水量95.5ミリ（25日観測）、1時間最大降水量24.7ミリ（25日午後10時観測）となりました。

県南部では大台ヶ原（日出岳）で780ミリの降水量を記録するなど、大雨に見舞われました。風速については、県南部の記録は残されていませんが、奈良地方気象台での観測は最大風速18.7メートル/秒（25日午後7時観測）、最大瞬間風速27.5メートル/秒（25日午後10時36分観測）。最低気圧は986.5ヘクトパスカル（25日午後9時36分観測）でした。

3. 被害のようす



強風で壁が倒壊した三条通り
（写真提供：奈良新聞社）



五條市の水田に打ち上げられた木材
（写真提供：奈良新聞社）

和歌山県白浜、御坊付近に上陸し、奈良県西部を北東進した台風の影響で、県内全域で強風が吹き、東部から南部にかけてはそれに豪雨が加わり、各地に倒壊や浸水被害を及ぼしました。

奈良市では、25日午後5時30分ごろに三条通りで板塀や高さ約10メートルの広告看板が飛ばされ、国鉄奈良駅（現JR）の街路樹2本が倒壊するなど風による被害が多く発生しました。午後8時ごろまでには市内の広い範囲で停電となり、電話も不通状態となりました。また、北葛城郡河合村（現河合町）でも、25日午後3時30分ごろに突風で民家が倒壊する被害が発生。同村はブドウの産地で、未収穫分のほとんどが落実してしまいました。

県南部では大台ヶ原の降雨量759ミリを記録するなど、強風に大雨が加わり各地で浸水や土砂崩れの被害が続出しました。

浸水被害では五條市が特に甚大で、吉野川の増水により25日午前8時に35戸が浸水し始めました。その後「午後七時ごろには五條市付近で三・六メートルの警戒水位をオーバーして水位は五メートル、同九時すぎには五・五メートルと最高水位を示して野原、百間両堤防の決壊という不安に襲われた」（『大和タイムス』

昭和33年8月27日付「被災者は三百九十名」ことから、避難する範囲が広がりました。同川流域では吉野町、大淀町に避難命令が出ています。五條から南部に向かう道路はことごとく寸断されて南部に向かう唯一の交通手段であった路線バスも運休しました。

賀名生村（現五條市西吉野町）では25日夜、重要文化財の春日本殿に樹齢300年の杉の大木が倒れかかり屋根が大破。大塔村阪本では劇場が流失しました。

十津川村では、多くの人的被害があり台風が接近する25日以前にすでに1名の死亡と1名の行方不明者を出しました。25日午後4時ごろには同村小原の旅館が半壊して家族は十津川署に避難しましたが、その警察署も午後8時50分ごろに裏山が高さ7メートル幅20メートルにわたって崩れ、公舎が全壊し道場や鑑察室などが半壊しました。ほかに午後9時40分ごろに同村平谷の映画館が流失し、長殿の発電所では機械が水に漬かり発電ができなくなりました。十津川村では500名近くが避難しました。

■3-1 人的被害

被害のほとんどが十津川村で発生し、山で働く人たちが被害に遭う事例が多く見られました。

8月24日（日）午後4時30分ごろ 吉野郡十津川村

作業員の男性（26歳）が風屋ダムの排水路出口でコンクリート枠組立作業中、雨で緩んでいた川岸のがけが崩れて転落し頭を負傷。午後10時ごろ死亡した。

8月24日（日）午後5時ごろ 吉野郡十津川村

出谷川に魚捕りに出ている男性（55歳）が、増水した川に落ちて行方不明になった。

8月25日（月）午後8時50分ごろ 吉野郡十津川村

折立地区で砂利を採取していた土木会社の作業員宿舎が流失。中に6人いたが、1名はワイヤーロープを伝って脱出し、残り5名が流された。「助けてくれ」という声が近くの下平谷まで聞こえたが、豪雨のため手のつけようがなかった。男性（51歳）の遺体は26日朝、三重県南牟婁郡紀和町の熊野川べりに流れ着いた。残り4名は行方不明。

8月25日（月）夜 吉野郡十津川村

五百瀬地区の山崩れで民家が潰され、離れ座敷にいた男性3名が家もろとも寺谷に転落。27日午後6時ごろ、十津川村七色カブチの十津川の川原で男性（37歳）の遺体が腹巻1枚の姿で発見。水死だった。ほか2名は自力でがけに這い上がりたすかった。

8月26日（火）午前7時半ごろ 天理市石上^{いそのかみ}

中庭にあった電柱の腕木が台風で折れ、垂れ下がっていた電線に兄（27歳）

が触れ感電。悲鳴を聞いて妹（16歳）が駆け付けたが、足を滑らせ転倒した拍子に電線が首に触れ感電。ショックで即死した。兄は人工呼吸で蘇生し、右腕に2週間の火傷を負った。



少女が感電した現場（写真提供：奈良新聞社）

日時不明 吉野郡十津川村
十津川村消防団からの通報に

よる警察未確認情報として、高津地区にあった200名収容の作業員宿舎が神納川の増水で押し流され1名が死亡したとされている。

■ 3-2 被災者への救援

台風が去った後も、それでほっとひと安心できるわけではなく、浸水被害に遭った人たちが元通りの生活を取り戻すためにはさまざまな労力が払われました。河川のはん濫は単に川の水があふれるだけでなく、下水や汚水などもみ込んで付近一帯を洗うことになり、水が引いた後はいち早く防疫作業が行われます。

特に被害が大きかった五條や十津川では被災を受けた1世帯あたり、毛布、男女大人用子ども用シャツ各2枚、編み上げ靴1足、ズボン1着、タオル2枚が救援物資として支給されました。



五條市にて浸水家屋を防疫する消毒班
（写真提供：奈良新聞社）



台風が去って安堵の笑みがこぼれる五條市の住民
（写真提供：奈良新聞社）

4. この災害の特徴

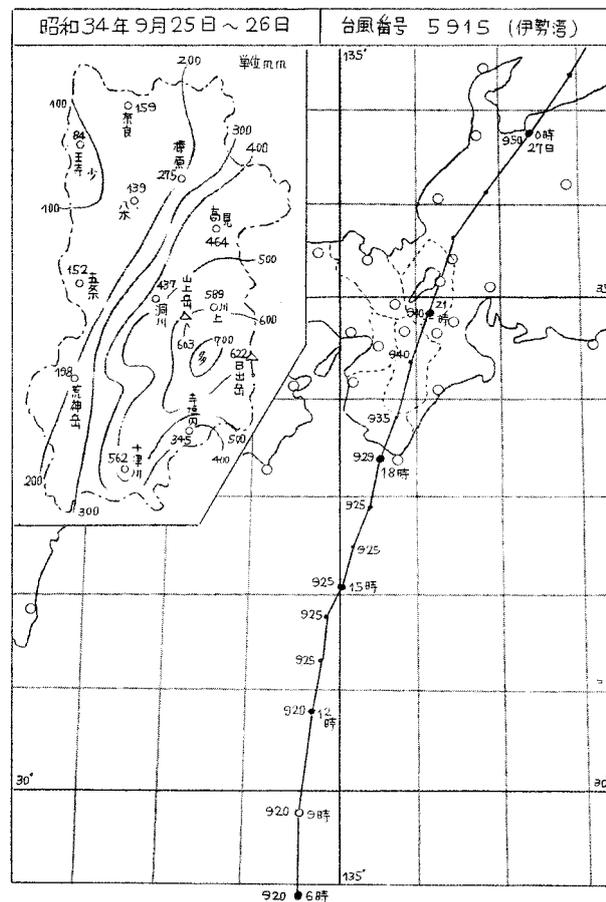
昭和33年の台風第17号は、高野山から五條市に入り、王寺から生駒山を通過して木津方面に抜ける経路を取りました。台風がこのコースをたどるのはそれまで4回ほどありましたが、いずれも勢力が弱まり熱帯低気圧化した状態で県内を通過しました。9名が犠牲になるなど大きな人的被害が出た一方、被害総額については9億8,000万円と昭和28年9月の台風第13号のおよそ10分の1という規模でした。

100名以上の犠牲を出した 戦後の県史上最大級の台風惨禍

日本列島の東半分をなめるように弧を描いて進行した伊勢湾台風は、非常に広い暴風域を持っていたため全国で5,000名近い死者、行方不明者を出す大惨事となりました。奈良県でも山津波で一度に58名の犠牲者を出すなど死亡84名、行方不明30名に上り、経済的損失も183億円を超えるものとなりました。

1. 台風の進路

9月21日マリアナ諸島東海上で発生した台風が猛烈な発達を見せながら北西に進行。最盛期に達した後も勢いは衰えることなく、25日夜潮岬の南南西700キロメートルに到達した時点では中心気圧910ヘクトパスカル、中心付近の最大風速60メートル/秒、暴風雨の範囲は約700キロメートルにも及びました。そこから台風は進路を北に変え、26日正午潮岬南南西300キロメートルに迫った時点でも勢いは衰えず、同午後6時ごろ潮岬の西方10キロメートル付近から紀伊半島に上陸し、午後7時ごろから8時すぎの間に奈良県を縦断。三重県名張付近を通過して27日午前0時すぎには富山市の西方から日本海に抜け、同日朝には秋田沖、午後には北海道の南海上に去っていきました。



台風の進路と県内降水量分布図
 (『奈良県に大被害を与えた主要台風の解説』より)

2. 県内の天候の推移

県内では台風が上陸する前日の25日の午後から、前線の影響で雨が降り始めていて、翌26日午前9時までで奈良で52ミリ、南部山岳地域で100から200ミリ

期間9月25日～26日		
地 点	総降水量 (mm)	日最大降水量 (mm)
八 木	139	81
大宇陀	203	151
王 寺	84	49
曾 爾	478	386
五 條	152	124
山上岳	603	483
河 合	721	620
荒神岳	198	173
十津川	562	497
日出岳	622	427

主な地点の降水量（『奈良県の台風40年』より）

の降雨量がありました。この間に伊勢湾台風における1時間最大降水量18.4ミリ（25日午後4時7分観測）を記録しているため、台風上陸以前より雨が相当に降っていたことが分かります。

26日の午後からは台風の影響で風雨が強くなり始め、午前10時に風雨注意報を出していた奈良地方気象台は、午後2時に暴風雨警報、その3時間後に洪水警報を発表しました。県水防本部も午前11時30分に水防指令第1号を発表し、午後2時には第2号に切り替え、県内48市町村の水防団員1万3,000名に出動が命じられました。奈良地方気象台では、総降水量157.7ミリ（9月25日から26日観測）、日最大降水量102.4ミリ（26日観測）、1時間最大雨量17.4ミリ（26日午後5時25分観測）が観測さ

れました。ほぼ同じころ大台ヶ原山頂の日出ヶ岳で1時間当たり40から50ミリ、山上岳で50ミリから80ミリの降雨がありました。

風は午後5時から7時ごろにかけてが最も強く、同じく奈良地方気象台の観測記録では、最大風速が東北東の風23.3メートル/秒（26日午後7時26分観測）、最大瞬間風速が、東北東の風32.6メートル/秒（26日午後5時5分観測）となり、台風が北陸沖に進んだころには風雨とも弱くなり、明け方にはすっかり収まりました。この台風は上陸寸前の気圧が929ヘクトパスカルという猛烈な勢力を持つもので、県内を通過する時点でも最低気圧951ヘクトパスカルを示していました。

3. 被害のようす

県内に暴風雨警報が出された9月26日午後2時ごろからは、奈良県をはじめとした各地の商店街では、一斉に店じまいを始め台風の襲来に備えました。鉄道各線は近鉄と奈良電鉄（現近鉄京都線）で午後4時50分ごろに全線運休。国鉄は午後5時15分に遠距離運転を休止し、バス路線も山間部の運転を休止しました。県水防本部が災害発生に備え、陸上自衛隊に出動要請したのは午後0時すぎ。大久保駐屯地（京都府宇治市）より先遣隊として通信、偵察、情報班16名が午後5時に県内に入りました。

大和川が流れる生駒郡三郷村（現三郷町）では、正午ごろから堤防沿いの数十世帯が家財道具を持って近隣のお寺に避難し万一の決壊に備えました。午後5時ごろに大和川は増水し出したため、川沿いの住民が公民館などに避難しました。

天理市でも大和川増水を警戒して、午後4時すぎに柳本町の住民



伊勢湾台風のひと月前に発生した田原本の水害のようす
（写真提供：奈良新聞社）

が小学校に避難するなど事前に備えました。午後5時ごろには大和川支流の寺川で水位2メートルとなり警戒水位1.85メートルを突破。大和川上流部の大三輪町（現桜井市）でも午後6時に警戒水位を突破しました。

田原本町で大和川（初瀬川）の堤防が約30メートルにわたり決壊したのは26日午後9時前でした。それにより付近の田畑が冠水し、自衛隊59名が出動しました。「この食い止めに二十七日朝までかかり、その後は地元民が応急修理を行った。同場所は去る八月十三日の台風七号でも決壊したところで、こんどは堤防、台場の二重決壊し」（『大和タイムス』昭和34年9月28日付「大和川で30メートル決壊」）、田原本町ではその場所以外にも各所で大和川があふれました。

■ 3-1 19市町村に災害救助法が適用

交通や通信の途絶により確認がとれなかった県東部から南部にかけての山間地域の状況が明らかになるにつれ、そこでは北和、中和地域とは比較にならないほどの甚大な被害が出ていることが分かりました。それを受けて県では、26日午後10時48分、五條市に災害救助法の適用を発表したのを皮切りに、27日午後4時までの間に宇陀郡や吉野郡の12町村に対して同法の適用を行いました。続く28日には月ヶ瀬村（現奈良市）をはじめとした3町村、29日午後3時には上北山村、その30分後に十津川村と大塔村（現五條市）にも適用を決め、県内48市

件名 村名	人的被害(名)			家屋被害(戸)						非住家 被害(戸)	罹災者 (名)
	死者	負傷者	行方不明	全壊	半壊	流失	床上浸水	床下浸水	一部破損		
月ヶ瀬		1			7	1	25	14		38	198
五條	4	2		320	297	116	1,960	568		3,099	9,295
西吉野				5	12	8	32	55		57	229
大塔		3		5	10	8	12			38	139
下市		6		13	23	81	262	303		385	1,147
天川				14	52	6	145	465		217	866
黒滝	6	2	1	7	20	5	20	49		61	149
大淀		5		12	77	54	694	324		842	2,730
東吉野	2	8		1	32	103		417	250	563	1,679
菟田野	2			9	93	10	434	764		548	2,003
榛原	2	1		1	12	3	286	239		305	1,028
曾爾	4	6		24	53	12	250	160		349	1,432
御杖	1	1		31	65	13	250	150		361	1,044
室生	7	3	1	17	46	13	46	230		133	437
十津川		1	2	11	13	32	13			72	298
吉野	3	5	1	20	152	59	668	200		1,008	3,594
川上	51	60	25	82	77	97	291	83		683	2,037
上北山	2			141	109	15	67			334	1,039
下北山				42	59	9	58	36		168	656
計	84	104	30	755	1,209	645	5,513	4,057	250	9,261	30,000

災害救助法適用19市町村の被害状況（奈良県警調べ10月10日発表）

町村のうちの約4割に当たる19市町村に対して災害救助法が適用される結果となりました。

以下では、災害救助法が適用された市町村の台風襲来による被害の状況を見ていきます。

吉野郡川上村

川上村は伊勢湾台風で、最も甚大な被害を受けた地域になりました。中でも山間の丘陵地帯にある高原地区で、高さ200メートル、幅150メートルにわたって山津波が発生し、死亡46名、行方不明12名を出す大惨事が同村の被害規模を大きいものにしました。

台風襲来前後の村内の様子は『吉野・川上の源流史 伊勢湾台風が直撃した村』に詳しく描写されています。著者の辻井英夫氏は、当時川上村役場に勤務し、被災後は情報収集、連絡係、救援物資の配布などに奔走された方で、写真なども数多く残されています。辻井氏の記録によると、「23日、秋分の日には北和田の第三小学校で村民による陸上競技大会が開催される予定になっていたが、前日から降り続く雨のために中止となった」と記されていて、台風前より雨が降り続いていたことが分かります。雨の降り方は地元で「背降り」と呼ばれる性質の、山の背を雨が走るかのように降り、少しやんで、また降るといような断続的なもので、台風の接近を知らせるものでした。辻井氏はその日、東川地区にある木材検査所での勤務でしたが、2、3日降り続いていた雨のために材木の搬出はほとんどなく、職場の主任より「台風の接近もあるから、昼から帰ってもいい」と言われたものの、結局午後2時ごろ帰宅しました。その時、すでに風雨は激しく川の勢いは増し、水位は上昇していました。以下、被災時の様子を『吉野・川上の源流史 伊勢湾台風が直撃した村』の記述から引用します。

「私が住む大滝地区では、雨が降り続く昼間から消防団員や山林作業員によって、川側に位置する家々をワイヤーで縛ったり、タンスなどの家財を避難させるなど、これまでにない厳戒態勢を敷いた。定期バスが4時頃に吉野町の国檜方面から上がってきたが、ここ大滝から上へは通行が不可能ということになって引き返していった。

私の家の家財道具も一段高い前の家に避難させてもらっていたが、まだ明る



上流に向かって流された大滝地区の住宅
（『吉野・川上の源流史 伊勢湾台風が直撃した村』より）



大規模崩落があった寺尾地区
（『村史最大の惨禍 語りつぐ伊勢湾台風』より）



高原地区災害前と災害後

(『吉野・川上の源流史 伊勢湾台風が直撃した村』より)

かった夕方6時頃、突然土間が吹き上がった。それを見て、もうこの家もダメだと、手伝ってくれたK氏と慌てて避難した。それこそバケツをひっくり返した雨のなか、土倉邸前の国道に大波が打ち上げられるのを見て、少し遠回りをして実家にたどり着いた。家の横の谷もすでに相当な増水で、大川の影響もあって流れが阻止され、濁流が道路や周辺に溢れかえっていた。

あまりにも増水が速いことに驚かされた。寺尾地区で起こった山崩れが原因だったかもしれないが、やはり時間雨量が示す62、60、86ミリという猛烈な豪雨が長時間かつ流域全般に降ったことが原因であったと思われる。私の実家も川の増水と横の谷の溢水で危険となって、両親が避難していた親戚宅に私も避難した。谷の水が、川の増水によって流れが押し戻されて家の中に浸水してきたのだ。

想像を絶するような風雨の音、逆巻く川の音、柱がきしむ音、人間の力で

はどうしようもない自然の驚異のなか、濡れた服のまま避難所を出たり入ったりした。しかし、外の光景を見ることはもちろんできなかった。ひょっとしたら、耳しか働かなかったことが精神的にはよかったのかもしれない。

そんな雨も、深夜0時には嘘のように上がり、風も収まった。荒れ狂ったあとの国道に出てみると流木の山で、埋もれていた古株が酸素と反応してリンの青白い光を放っていたのが印象的であった。ふと見ると流木のなかに基盤もあり、上流での被害状況が想像されたが、この時点では、まさか72名もの犠牲者があったとは夢にも思わなかった。」 (『吉野・川上の源流史 伊勢湾台風の直撃した村』より)

文中にある「寺尾地区で起こった山崩れ」とは、民家17戸をのみ込んだ大規模崩壊のことで、住民は避難した後だったため人的被害は小さく済みましたが、それでも2名が犠牲になっています。交通も通信も途絶して、村内にいた者すらが被害状況は想像するしかないような中、27日午後3時30分ごろに川上村住民が徒歩7時間かけて吉野署までたどり着き、被害の通報がなされました。そこで初めて高原地区の山津波で多くの犠牲者の出ている事態が判明しました。

生存者などからの話を総合すると、山津波発生当時の状況は、折からの豪雨で山から噴き出す水が川のようになっていたという前兆がありました。そして、その水はけに12名の救援隊員が駆け付け作業を行っていたところに、突然ゴォーという音とともに山津波が襲ってきました。時刻は午後9時10分。土砂が斜面

を落ちる衝撃で、集落の家々の時計はその時刻を指し示したまま止まっていました。男性31名、女性27名が生き埋めになり、そこには小学生4名、中学生4名も含まれていました。

川上村の広報誌『かわかみ』が編集した『村史最大の惨禍 語りつぐ伊勢湾台風』には、経験された方の貴重な証言が数多く掲載されていますが、その中から高原の山津波について語られている部分を下記に抜粋します。

災害発生時に自宅にいて、母親と弟夫婦、小学4年生の息子を失った女性の話

「当日は、うちの家の下でこんな小さな谷なんですけど、どっから出たのかなと思うような水が溢れてまくれるように流れてました。谷の横にあった近所の家の便所が4時頃に見てる前で流されてね。慌てて、離れの様子を見に行きました。すでに橋が流れて谷を渡られへので「怖くないか。」って聞いたら、「怖くない。橋で流れてるから来られへんで。」って出てきて話しました。見たのはそれが最後でした。

お母さんは土の上に出てたから死んだんやなと分かったけども、残りの3人はどこかで生きてるかも分からへんと思って、ベチャベチャの水のところへ入って、備中（くわ）を持って真剣に掘ったんです。探すために。

だけど、なんぼ探しても見つからんでね。最後に役場から「上市で台風の後小学生が2人あがってるけど、該当者は無いか。」と翌日に言うて来てくれたけども、ここで埋まってると思ってるから相手にはせえへんでん。

そやけども、どうしても見つからんでその話を聞いたら、「警察に行きなさい。」と言うことで、私は主人と歩いて上市まで行きました。そして出された写真を見るとやっぱり自分の子どもやってん。「お父さん、うちの子や。」って言うたら、お父さんが「まあ考えてみ。高原からなんでこんな所まで流されるねん。よその子やったらアカン。」ということで、警察立会いで確かめるために墓を2人で掘りました。そしたら、腐っててもう分からへんけど、私は「うちの子や。うちの子や。連れて帰りた。」って泣いて頼みました。

私は「絶対、うちの子やから連れて帰りた。」って言うたら、警察の人は「自分が生んだ子。お母さんは直感があると思うから、きっとそうに違いない。連れて帰ってください。」と言うてくれたんです。そやけど、お父さんは「よその子やったらアカンよって、もっと考え。頭冷やせ。」って連れて帰ってくれなだんです。

帰ってきたけど、私は残念で残念で。そしたら、お父さんがもらいに行ってくれました。でも腐ってますから、山で焼いて骨にして連れて帰ってくれました。なかなか燃えんで難儀したと聞きました。

しかし、備中で掘ってたときですわ。土の中から坊主頭の頭皮を誰かが掘り出しました。「男の子の毛のない頭の皮が出てきた。」との声に私は走って行って、それをもらいました。そして、バケツで洗って「お父さん、出てきた。頭の皮が出てきた。坊主の頭が出てきた。」と言って見せました。しばらくして思いましたが、ようあんなこと出来たなと。「自分の子の死体の一部がどうしても欲しい。」そんな気持ちでしたんでしょ。



自衛隊の救出活動

(『村史最大の惨禍 語りつぐ伊勢湾台風』より)

それから日が経ち、上市で見つかったんがうちの子やったんで、それは違う子やってんなと分かったんです。本当に地獄を味わいましたわ。

消防団の弟も上市まで捜しに行きました。でも自分の身内が居らんと思ったら、皆、死体でも欲しいと思うんです。だから、最後には取り合いになってしもうてね。「俺のや。うちのや。」と言うんやけど、もう脹れて腐って誰か分からんでね。でも中耳炎の手術の後があって、うちの弟やと特定できたんです。たったそれだけのことで弟やとなったんです。

長いことかかって位牌が4つ揃ったとき、お父さんが男泣きに泣いて、「男って、こんな程泣けるもんかしら。」とビックリしたことがあります。」

(『村史最大の惨禍 語りつぐ伊勢湾台風』より)

災害で家族を失った場合、すんなりと遺体が遺族の元に戻ってくるというわけではないようで、それがさらにやるせなさを深いものにします。身元確認については、以下のような証言も残されています。

「行方不明が12人になっているけども、ほんとうはもっと居たんです。遺体の一部、片手や片足などが発見されて、本人かどうか確実に分らん人でも「そうちゃうかな。」とそんな感じでした。

私も上市辺りまで確認に行きました。「下流の人から確認したけれども該当者が居らん。高原の人と違うか。」と警察から連絡がありました。それで確認に行ったんですが、遺体というのは男の片足ですわ。特徴がほかの該当者と比べても合わんので、「多分、叔父さんやと思うから、これでもう承認せい。」という事が当時は外にもありましたな。」(前掲誌より)

また同書には、現場で生存者に治療を行ったという貴重な証言も掲載されています。

災害現場で治療行為を行った地元医師の話

「あの晩、夕食を済まして9時10分頃ですわ。向かいの山から大砲打つような音がドォーンとしたんです。何の音やろうなって思いました。

10時10分頃になって、「早く来てくれ。エライこっちゃ！」って呼びに来てくれました。その時、ドブドブの泥みたいな土砂に首まで埋まった生存者が泥の中を泳ぐようにして助けられました。片手が動くので茶碗のカケラを振って、ピカピカしてたんですわ。それで「あそこにいるんちゃうか。」と言うことで救助されたんですな。

垂木で抑えられておったそうで、怪我してますわな。早く傷の手当てをしたって欲しいとなったんですわ。それで救護班が結成されました。私ともう1人が救護班となって、ぼちぼち救護活動を始めました。

天井のホコリや便所の汚物などが土の中で練られてて、普通の怪我と違い一刻を争うんですわ。

手をあんじょう洗わんで、お腹を壊して下痢。この下痢は普通の下痢と違って感染症なんで放っておくと大変な問題なんです。そやもんで、注射も打ちました。そんな救護活動が薬事法違反ということであれ



被災地入りする日赤医療班

(『吉野・川上の源流史 伊勢湾台風が直撃した村』より)

ば5年以下の懲役か10万円以下の罰金だったんです。だから、きっちりと何時何分に何を注射した。何を飲ませた。それを全部記録しました。しかし、罰金と刑務所行きは覚悟の上でした。

9月26日の10時50分から私の治療は始まったと記録してあります。使用した薬品と看護した人の名前は明記して残してあります。

治療したのは96人程やったと思います。治療の回数にしたら毎日のことです。寝られん人も居るし、血圧の下が115程に上がっている人、血圧の上が200～230まで上がる人などたくさんいました。

それで、赤十字のお医者さんが来てくれるまでの9月26日～10月9日まで私の治療は続きました。それからは気も楽になりました。」
(前掲誌より)



高原地区に建立された伊勢湾台風遭難者の碑

また、この男性は災害発生時を振り返り、このように述懐しています。

「大水が出ていてもキレイな水が流れているときは怖くないんです。しかし、いつも流れていない谷が大水になって黒く濁ってきたときは上の山が動いていると。石垣からの吹き水が黒く濁ってきたから早く避難せえ。これらは危険を知らせる警報ですわな。

伊勢湾台風の時にね、このことを1人でも知ってる人が居れば58人の犠牲者が出なかったと。これは危険やから避難せえと言えたのになと、いつも思っている次第です。」

(前掲誌より)

高原地区はこれまでも台風の襲来は何十回となく受けてきましたが、高台にある集落という立地も関係してか大きな被害が出ることはありませんでした。それが突然の悲劇に見舞われ、「1300年間平和だった村がどうして」と首をかしげる住民もいました。山仕事を生業としている住民の話では、もともと水気の多い周囲の山に多量の雨が降ったことに加え、伐採した杉の切り株が腐り、それが地表をはがして山津波の発生につながったのでは、という意見もありました。

この高原のほかにも川上村は各地で災害が発生し、村内26大字のうち被害のなかったのは、^{おぼだに}伯母谷のわずか1か所だけで、残りはくまなく被害を受け、村全体での犠牲者は死亡53名、行方不明19名となりました。



旧第三小学校の校庭へ降りたヘリコプター
(『村史最大の惨禍 語りつぐ伊勢湾台風』より)

交通も通信も途絶え、各所に出た孤立集落では食糧不足となり不安をいっそうかきたてました。月初めに農業組合から配給米を受け取る矢先の災害発生で、各家庭にはほとんど蓄えがない状態だったのです。

川上村をはじめ上北山村、下北山村の実態調査のため30日に自衛隊のヘリコプ

ターが出動しましたが、着陸場所となる川上村北和田では、着陸標識がわりに生徒たちが「タスケテ」の人文字を描き、その到着を待ちました。降り立った操縦士に村民らが殺到し、「米を送ってくれ」「あと1日で食べ物がなくなる」と窮状を訴え、村外にいる肉親、知人に渡してほしいと手紙を託され、操縦士のポケットはそれで見るといっぱいになりました。

五條市

市の中央を吉野川が貫く五條市では、「吉野川が増水すればすぐ床下浸水がある」（『大和タイムス』昭和34年9月28日付「ドロの町・五條に行く」）地域であったため、台風襲来の予報を聞くと、いつものように畳を上げて机などの上に乗せ、その上に寝具などを置くなどして浸水被害に備えました。架け替え工事中だった大川橋の仮橋を午後1時50分ごろに流失させた川の勢いはやむことがなく、水かさはずっと増えていきました。

午後8時30分ごろついに川がはん濫し、住民は市役所や学校に避難しました。避難命令は出水のかなり前に出されていましたが、逃げ遅れた住民は2階や屋根に逃れ、そこで救助が来るのを待ちました。浸水地区の住民の中には、山手の五



台風通過後の県内の様子（『大和タイムス』9月28日付2面）

條町側に避難する人もいましたが、対岸に渡る大川橋は仮橋が流されてしまい、杭が打たれて通行止めになっていた本橋を何とか渡り難を逃れることができました。大川橋本橋は本来もっと早い時期に解体が予定されていましたが、それが延期していたため命拾いした人もいました。

市内にある水位観測所では午後10時に、量水標に刻まれた最大目盛り7.5メートルをはるかに超す水位10メートルを記録。土地の古老も「七十余年ここで生活しているが、こんな大水はめずらしい。たしか六十五、六年前に一度こんなことがあった。その時はちょうど今の太田町国道筋の高台にある地裁五条支部の松林に舟をつないだ」（前掲紙）というくらいの水量で、五條市では市民の4分の1が被災者となる大水害に見舞われることになりました。

とにかく水の勢いがすさまじく、一時は10分間に1メートルも水かさが増し、瞬く間に天井まで水が上がった家もありました。水は1週間後もすっかりと引くことはなく、戸外に運び出された水を含んだ畳が腐り始め、周囲に悪臭が漂うような状況がしばらく続きました。

吉野郡（吉野町・大淀町・下市町）

26日午後7時30分ごろより吉野川が急に増水を始め、水位は10メートルにも達しました。同8時ごろには堤防から水があふれ出し、あっという間に大淀町下淵、下市町阿知賀一帯が濁流に包まれました。大淀町では民家、官公舎や病院などが水に漬かり、病院では1階の天井まで水が来て患者が2階に避難するなどの状態に



吉野町に設置された伊勢湾台風痕跡水位の碑。
玉の部分まで水が上がってきた。

なり、下市でも民家などが浸水。吉野町でも中学校の木造校舎1棟と運動場が流失するなど、吉野川流域に大きな被害を出しました。同川に架かる千石橋はすっかり水をかぶり、水が引いた橋上には乗り上げた流木があふれていました。

宇陀郡（菟田野町・榛原町・室生村・曾爾村・御杖村）

県内で台風の進路に一番近かった宇陀郡では、午後7時前後より、郡内の宇陀川、芳野川、室生川が一斉にはん濫し始めました。菟田野町、榛原町、室生村（以上、現宇陀市）を中心に被害が発生し、曾爾、御杖、室生村田口方面の奥宇陀地区へは27日午後3時になっても連絡のつかない状況が続きました。

菟田野町では、宇陀川の支流芳野川が午後7時すぎからあふれ出し、30分後には決壊。芳野川に沿って带状に広がる民家を濁流が襲い、ほぼ全町が水浸しになり同時に停電しました。町民は大雨と大風の中、警察と消防団の誘導で近くの役場や学校に避難しました。深夜には自衛隊も出動しましたが強風のため防水作業を断念。菟田野町内では芳野川が十数か所で決壊して川に架かる橋もほとんどが流失してしまい、一時は流木が屋根のひさしに届くくらいに増水しました。

芳野川の下流になり、宇陀川と合流する榛原町では、役場裏で午後7時30分



流木が橋げたに引っ掛かった榛原町天野橋
(写真提供：奈良新聞社)

ごろよりはん濫し、町内が床上浸水しました。最終的に町内の宇陀川に架かる橋が天野橋を残してすべて流失してしまい、全町の7割が浸水するまでに被害が広がりました。

芳野川は昭和27年までに改修が行われ1時間40ミリの雨量にも耐えられるよう川幅が拡張されていましたが、長雨が続いた直後に集中豪雨に見舞われたため決壊してしまったと見られています。

室生川がはん濫した室生村では、室生寺にかかる太鼓橋の橋げたに流木がたまり、そこから水があふれ出しました。川沿いの門前町は水に漬かり、ついに太鼓橋も流失。室生寺は孤立状態となり、県道筋の門前町だけで10軒以上が水に流されてしまいました。当時を知る人の証言では、台風の来る3日間はバケツをひっくり返したような雨が降り続いていたということでした。

奥宇陀地域の曾爾村や御杖村では、26日午後8時ごろには交通や電話、電信の一切が途絶えてしまい、被害状況がまったく分からないままでした。それが、27日午後3時30分ごろに、曾爾村の消防団員3名が徒歩で被害状況を報告に訪れたことでようやくその実情が判明しました。そのときの村内の様子が、報告を終えて帰村する消防団に同行した新聞記者の取材記事に記されています。

「途中の県道はいたるところ決壊して浸水した家屋はあとかた^(ママ)ずけに懸命になっている。榛原町内牧支所^{うちまき}の手前の県道は流失してしまっている。第一の難所を山づたいに歩く。樋口橋流失のため高井の西側の山道を遠回りに回って県道に出ると、また橋が流失していて、濁流の内牧川にかけられた三本の丸木の仮橋がゆれて途中で記者は立往生……日はとっくに暮れているが二十六日夜から停電のため、どの家も真暗で、いやに静かである。内牧郵便局の公衆電話を回して見たが、電話はかからない。あわい懐中電灯の光を頼りに寸断された県道があると山によじ登ってウ回、山くずれや土砂くずれのところはヒザまで没するドロ沼で長グツが取られて歩けない。谷川で県道の流失個所の多いのに驚く。」

(『大和タイムス』昭和34年9月29日付「道なき六〇キロ曾爾村踏破記」より)

記者は、道中の榛原町山間部で家が倒壊し男性1人が犠牲になった現場に行き当たりました。「道が流失しているので道の真中に家があるのかと錯覚を起こすくらいだ」(前掲紙より)と、一帯が土砂で埋め尽くされた様子を伝えています。記事は続きます。

「室生村田口カイロをすぎると杉などが倒れて、まるでジャングルの中をよりわけて行軍するようである。辰尾橋(室生村)まで榛原からバスで一時間のところを道なき道をはうように歩いて四時間かかって九時についた。……県道とは名ばかり。決壊、山崩れ、流失の連結で、立往生している奈良交通のバス二台のうち



曾爾村山粕で立ち往生したバス (写真提供：東吉野村)

一台は谷に転落、一台は倒れた木にはさまれていた。……曾爾村山粕^{やまがす}についたが、田が川になり川が道とな^(ママ)って、容相は一変、山つなみで埋没した数戸の家屋が惨たんたる残ガイをさらしている。」 (前掲紙より)

曾爾村役場に到着したのは28日午前1時30分。役場には駐在所の床上浸水で居場所を失った巡査が寝ていて、記者も村長が来るまでそこで仮眠を取ります。登庁し

た村長は新聞記者が現地入りしていることに相当驚いたようでしたが、わざわざ来てもらったことに感謝を示し、続けて道路の復旧も早くしてほしいが、食糧の供給が急がれることを記者に訴えました。その年は豊作が予想されていたので各農家とも残っていたお米も販売してしまっていて、お米が不足している状態でした。ほかに、「急患者が出たらこのような道では見殺しにするほかない」「停電がいつ復旧するか分からないのでろうそくが欲しい」「塩がない」などの村民の切実な声を聞き取り、「ぜひ新聞にも書いてほしい」との希望を託され、記者は榛原までの約8時間の道のりを引き返しました。

曾爾村、御杖村に通じる道路は10日午後ようやく応急修理が完了して小型乗用車が乗り入れられるようになり、それまで行われていた自衛隊ヘリによる食糧輸送が、陸路に切り替えられました。

吉野郡東吉野村

東吉野村は、伊勢湾台風で最も激しく雨が降った地域の一つであり、同村の『伊勢湾台風 被害状況報告書』によれば、9月26日午後6時20分ごろの時点で村西部の小川地域で517ミリ、南部の四郷地域で573ミリ、東部の高見地域で589ミリを記録しました。大雨で河川は増水し、そこに各所で発生した大規模な山崩れの崩土が流れ込んで河床を上げ、さらに川の水位が上昇した結果、同村始まっ



増水した川 (写真提供：東吉野村)



崩れた路肩 (写真提供：東吉野村)

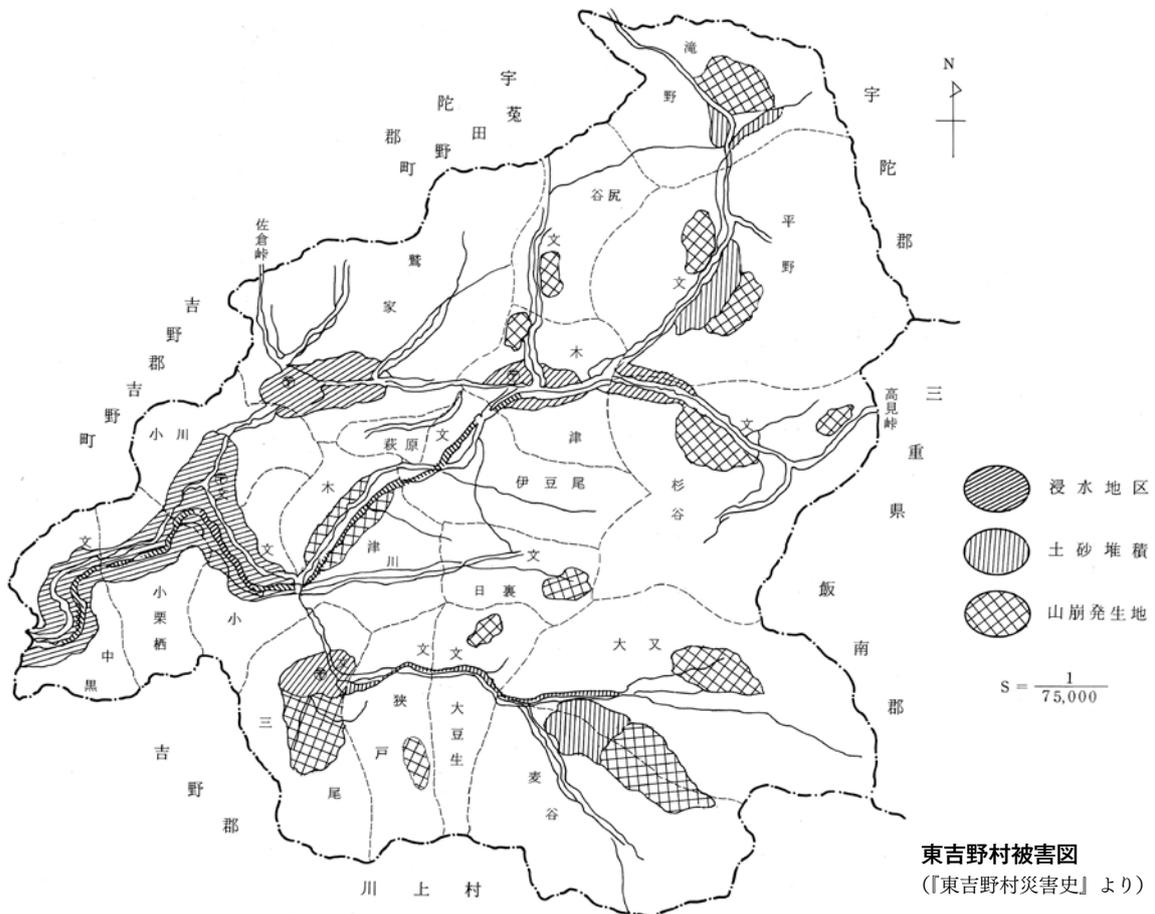
て以来の災害をもたらしました。

村内各所の状況については、東吉野村教育委員会が編集した『東吉野村災害史』に「各地の被害状況」として詳しく記載されています。それによると、

小川地区は浸水がことさら広範囲に及んだ地域ですが、これは高見川の本流に鷺家川わしかがわが合流している地点に当たり、互いの流れがけん制し合うように渦巻いて濁流が道路にあふれ出し、加えて背後の山からの出水もあり大きな被害となりました。濁流は道路を崩落させ、建物を壊し、材木市場から材木を流出させて、それが橋につかえて流れをせき止め、そこからさらに水があふれ出すという、止まることを知らぬという状況でした。

小川を中心地は泥水で沼のようになり、場所によっては軒先まで水が来ました。床上90センチぐらいまで浸水した人は「家を出たときは胸あたりまでの水で、材木がどんどん流れてくるし、倒れた電柱でたれ下がった電線をくぐって必死になって逃げのびた」（『東吉野村災害史』）と語っています。

三尾地区は標高393.4メートルのズキ山を中心にした3つの谷筋に集落が散在している地域です。この近辺は江戸時代末期に大ぬけ（崩落）をした危ない所として知られていましたが、大雨によりそこが崩れて流木と土石流が一挙に押し寄せ集落に被害を出しました。そのときの様子を『東吉野村災害史』では被害に遭った古老の話として「普段は水気のないとびわたりの谷に直径25cm～30cm位の木が「ドーン」という何ともいえぬ大きな騒音と共に立ったまま流れてきたことで



ある」と記しています。木の根が張った土ごとごとっそり抜けたために木が倒れずに立ったままで流れてきたことが推測できます。そのような土石や立木で谷がふさがれたため、濁流はあふれ周囲を水浸しにしました。



増水して橋梁の上を流れる川（写真提供：東吉野村）

^{むぎたに}麦谷地区の被害も大きいものでしたが、その原因は土石流と流木でした。在所から約1.6キロ奥の山が連日の雨で大荒れしたところに、伊勢湾台風による豪雨で崩れた倒木と土石流が麦谷川を下り在所まで押し寄せてきました。そこに山より流れてきた谷水が加わり、ついに濁流が川からあふれ民家を流してしまいました。住民は橋にひっかかった流木や土石を取り除こうと試みましたが危険でどうすることもできません。専門家の推定では土石の量は3万立方メートルにも達しました。麦谷川の上流では土石流で、5メートル×10メートルもある岩が200メートルも流されてきました。

杉谷地区を流れる杉谷川は、高見山系の溪谷からの土石流と洪水により未曾有の大出水となりました。被害の発生は午後6時ごろから8時に集中していますが、ちょうどこの前後に、脇谷という場所で大崩落が発生していて、崩土で谷がせき止められてできた土砂ダムが決壊したと推定されています。一挙に押し寄せた大水は河川沿いの民家を瞬く間に流失させ、地区内は濁流がごう音をたてて逆巻き、さながら荒れた海原のようになりました。脇谷の大ぬけした個所は、もとは根のしっかり張った雑木林でしたが、植林され5年ぐらいたったところで根張りが弱かったようでした。同所には堆積土砂で谷間に山ができ、土地の人からは杉谷の「昭和新山」と呼ばれています。

鷺家地区の様子は『東吉野村災害史』に、ある住宅の避難に駆け付けた消防団の行動とともに記載されています。それによると、そのとき鷺家川は警戒水位を突破し、渦巻く濁流が橋の欄干を叩くほどにまで増水していました。電灯は消え街路は暗闇で、濁流の怒とうの響きだけを耳にしながら消防団員は危険状態にあった住家に到着しました。吉野建の家屋は階下が濁流に洗われ流失の危険があり、消防団員が家財道具を安全な所に運び出しました。そのとき、「赤谷川の暗^{あん}渠に流木や土石が詰まり本流がせり返り裏木戸を突き破って一挙に流れ込んで、土間から座敷へと土石を伴った濁流が轟音をたて貫流した。雨は更に激しさをまし暗闇の中で懐中電灯に照らし出された行き交う人々の顔は不安と焦燥で青ざめていた。街路は危険で連絡もとれず区内での被害情報は全く不明であった。」（『東吉野村災害史』）、という状況でした。

台風が去った翌朝にその場所を見に行ってみると、「県道には軒高くまで土砂

が堆積し、家を通り抜けた濁流は県道に流れ込み沿道の隣家数戸が床下浸水し、道路は河原のように土砂が敷き詰まっていた。家の中は建具が押し流されて裏まで筒抜け、土砂だけが床上に一m位も積もっていた。」(前掲書)という状態で、出水そのものより土砂流出による鉄砲水の被害が大きかったようです。同書では続けて「渓谷に架る暗渠や耕作物が障害となり被害をもたらしたことは見逃すことの出来ない教訓ともなった。」と締めくくっています。

台風が残したつめ跡はことのほか大きく、東吉野村での救援活動は160日間続けられ、他に行方不明者の捜索に600日、土砂除去など家屋の救難950日、食料輸送970日、県道応急補修6,000日、村道補修3,000日、橋梁架設等1,720日、河川応急復旧1,500日、電気復旧300日、電話復旧支援250日と、後処理にとってもない時間と労力がかけられることになりました。

ほか、黒滝村では土砂崩れで住家2戸がつぶされ5名が命を失うなど7名の人的被害が発生し、上北山村からは消防団員ら4名が28日午前7時45分に徒歩で村を出発して29日午後3時ごろに県災害対策本部にたどり着き、死者2名をはじめ被災者総数740名に達しているとの報告がありました。下北山村からは29日午前9時に関西電力の無線電話で県災害対策本部に連絡が入り、大塔村、天川村、西吉野村、十津川村でも被害が出ていることが伝えられました。県南西部の野迫川村は被害が少なく、道路決壊20か所、がけ崩れ5か所があったくらいで、民家への被害はほとんどありませんでした。県災害対策本部が10月12日発表したところでは、被害額は183億900万円に達し、うち土木被害が74億円2,900万円、山林被害が46億4,100万円、農作物被害が13億2,500万円に上りました。

台風通過後も地滑りの発生が危ぶまれる個所が続々と見つかり、川上村高原地区の山津波現場からほど近い場所で周囲約1,000メートルにわたってひび割れが生じ、近隣住民が避難したのをはじめ、黒滝村や榛原町(現宇陀市)でも住民への避難命令が出されるなど、伊勢湾台風が残したつめ跡はなかなか消えることはありませんでした。

証言

台風の接近で学校は昼で終わり家の方に戻って来ましたが、その時点で平野川の水かさが増していて、「大丈夫だろうか」という状態でした。夜、隣の家が床下浸水したと騒ぎになり、私も手伝いに行きました。家財道具などを運び出しているときに、山ぬけのゴーというすごい音を聞きました。夜中1時ごろだったと思いますが、突然、視界が明るくなって空を見上げると月が出ていました。あれが、台風が目に入った瞬間だったのだと思います。

朝起きると、どうも村全体が大変なことになっているのを知りました。道路が川のようになって、橋もほとんど流され、10人以上が犠牲になっているらしいと聞きました。方々の集落が孤立しているらしく、私も消防団から動員がかかって、平野から4キロほど奥に入った滝野というところに米5升を背負い救援に行きました。橋が流れていたのでも山伝いにぐるっと回って集落に入らなければならず往復に1日かかりでした。そんなことがひと月ほど続いたと思います。

その年の暮れに高見山に登りましたが、見渡した方々が赤く山ぬけしていたのが今でも印象に残っています。

(東吉野村 当時高校3年生 男性)

■3-2 人的被害

川上村の項で前述した高原地区の58名が生き埋めとなった山津波被害のほかにも、各地で多くの犠牲者が出ました。当時の新聞報道も通信の途絶などで事実関係が錯綜し、必ずしも正確に伝えられていたというわけではありませんでしたが、その中でもある程度の状況が分かるものだけを記載します。発生日はすべて9月26日で、時刻が不明のものが多いことが災害発生時の混乱を色濃く示しています。

午後9時10分ごろ 吉野郡川上村

自宅が浸水し、隣家へ母、姉と共に避難していた男性（高校3年生）は、突然山の方から地響きが聞こえたため、思わず2階へ駆け上がった。同家は山津波に押し流されたが、男性は屋根のハりに足をはさまれたまま、胸から上をドロ沼から出して500メートル流され、3時間後に救出された。母（年齢不詳）と姉（年齢不詳）は行方不明。



消防団員が犠牲になった下多古の橋
（『村史最大の惨禍 語りつぐ伊勢湾台風』より）

発生時刻不明 吉野郡川上村

消防団の男性（21歳）が吉野川へ転落。

発生時刻不明 吉野郡川上村

男性（80歳）が吉野川へ転落。

発生時刻不明 吉野郡川上村

男性（年齢不詳）、妻（42歳）、男児（10歳）が家と共に流され、行方不明に。

発生時刻不明 吉野郡川上村

土砂崩れの下敷きとなり女性（27歳）と娘（5歳）が死亡した。

午後10時30分ごろ 五條市野原町

国鉄職員の男性（35歳）とその母親（55歳）、妻（36歳）と男性の妹（22歳）の4名が自宅にいたところ、堤防からあふれた水が押し寄せてきた。男性は家族を逃がそうと母親らを誘導して外に出たが、その途端に家屋が押し流されてしまった。母親と娘は自宅から300メートル離れたところで家屋の下敷きとなった遺体で発見され、男性の妻もその近くの国道端で発見された。

発生時刻不明 五條市

町内の菓子店裏の水田で土砂をかぶったまま死亡している女性（63歳）の遺体が発見された。

発生時刻不明 吉野郡吉野町

男性（25歳）が小型四輪で同町桜橋を通行中、橋と共に吉野川へのまれ行

方不明になったが、27日朝遺体が発見された。

午後4時ごろ 宇陀郡曾爾村

田んぼの見回りに行った男性（63歳）が帰宅途中、強風で倒れてきたスギの木の下敷きになり病院に収容されたが、27日午前4時30分ごろ死亡した。

午後7時30分ごろ 宇陀郡榛原町（現宇陀市）

避難する途中、男性（32歳）が芳野川の濁流にのまれ行方不明になったが、3日午前10時ごろ、名張市で遺体が発見された。

発生時刻不明 宇陀郡榛原町（現宇陀市）

宇陀川に転落して男性（76歳）が死亡した。

発生時刻不明 宇陀郡菟田野町（現宇陀市）

母（44歳）と長女（4歳）は土砂崩れで家もろとも押しつぶされ、翌27日午前7時に遺体で発見された。

発生時刻不明 宇陀郡曾爾村

曾爾川決壊により、衣料商の男性宅が流失し、妻（46歳）と長女（12歳）、母親（68歳）が流された。長女と母親は水死体となって発見されたが、妻は行方不明のまま。

発生時刻不明 宇陀郡御杖村

男性（77歳）が土砂崩れで家と共に埋まり、死亡。

夜 宇陀郡室生村（現宇陀市）

農業の男性（47歳）宅が土砂崩れで押しつぶされ、男性と妻（44歳）、母（82歳）、次女（12歳）、三女（10歳）、四女（6歳）の一家6人が生き埋めに。27日午後全員遺体となって発見された。

発生時刻不明 宇陀郡室生村（現宇陀市）

女児（9歳）が山崩れで家の下敷きになり死亡した。

発生時刻不明 宇陀郡室生村（現宇陀市）

村消防団田口分団長の男性（35歳）が室生川で警戒中転落し行方不明に。27日午後下流で遺体となって発見された。

午後6時ごろ 吉野郡東吉野村

家の裏の山が崩れ一瞬にして民家を押しつぶし、男性（62歳）が死亡した。崩れた山津波は増水中の川を突っ切って対岸の民家2軒を直撃するほどの勢いがあった。

発生時刻不明 吉野郡東吉野村

高見川の増水で弁天橋の警戒に当たっていた消防団員の男性（32歳）が、被害状況報告のため懐中電灯を頼りに橋を渡っていたところ、長さ約60メートルの橋の真ん中で、橋げたの流失に気付かず足を踏み外して川に転落、行方不明になった。28日になって、その妻（28歳）、長女（8歳）、次女（4歳）、三女（2歳）の4人が行方不明に。高見川の川岸に妻のゲタとちょうちんが見つかり、また寝室に残された遺書から妻子4人は後追い心中したものと考えられる。長女の遺体は10月1日朝、和歌山市の紀ノ川に流れ着いたところを発見され、6日午前10時30分ごろに吉野町宮滝の通称秋津野原で妻が、同日午後1時15分ごろ、同町宮滝芝橋下で夫が遺体で発見された。

発生時刻不明 吉野郡東吉野村

主人が留守中だった女性（53歳）が留守見舞いに来た親戚の者と、暗闇の中で台風が過ぎるのを待っていたところ、突然裏山が崩れ、あっという間に崩土が家に押し寄せ、ごう音とともに柱が折れ数人がその下敷きになった。暗闇の中で互いに声を掛けて励まし合い、ようやく救助されたものの、女性だけが力尽き死亡した。

発生時刻不明 吉野郡東吉野村

家の前を流れる川があふれ、濁流が屋内に押し寄せると目の当たりにした女性（61歳）が、心臓発作を起こし死亡した。

午後6時ごろ 吉野郡黒滝村

土砂崩れで家がつぶされて女性（56歳）と孫の女兒（7歳・5歳）が生き埋めになった。また、その隣家もつぶされ女性（47歳）と次女（15歳）も被害に遭った。いずれも27日昼過ぎに地元消防団員の手により探し出されたが、全員の死亡が確認された。

発生時刻不明 吉野郡黒滝村

男性（51歳）が土砂崩れのため家の下敷きとなり、27日午後遺体が発見された。

発生時刻不明 吉野郡黒滝村

女性（42歳）が洗濯中に誤って吉野川へはまり込み死亡した。

26日夜 吉野郡十津川村

十津川の増水により飯場もろとも土木会社の作業員3名（5名）が流された。うち1名の男性（46歳）は遺体で発見された。

■ 3-3 救援

救援活動で特に対応を急がれたのが、奥吉野、奥宇陀地方の孤立集落の食糧不足でした。山間部で耕地面積の少ない村が多く食糧は配給米に頼っていた上、通



荷物を背負って行き来する人々

(『吉野・川上の源流史 伊勢湾台風が直撃した村』より)



救援物資の仕分け

(『村史最大の惨禍 語りつく伊勢湾台風』より)

常の配給が月初であったため、月末に近い災害発生時はどこの家の米びつも底を尽きかけている状態でした。その深刻な事態に県は自衛隊のヘリコプターをチャーターして連日空輸を行い、応急修復された道路を消防団らが米を背負い行き来して対応しました。

災害発生から10日たった9月6日、県は厚生省（現厚生労働省）に対し、災害救助法の延長を申請しました。それにより、炊き出しが15日まで行われることになり、救援物資輸送は20日まで、医療は19日まで、学用品給付ではノートが25日まで、教科書が11月9日まで、住宅周囲の土石竹木取り除き20日まで、遺体の搜索と処理、埋葬が15日までと、種別により10日から15日間適用が延びることになりました。また、避難所は15日まで開設され、半壊家屋修理は11月9日までに完成。仮設住宅は30日までに着工することになりました。

天皇皇后両陛下から賜った見舞金2万円をはじめ、県内外から集まった義援金は、10月6日に第1回分として255万円を災害救助法適用の19市町村で分配しました。それと同時に救援物資も各方面から大量に届けられ、その仕分けに多くの人の手が必要とされ大変な作業となりましたが、寄せられた善意が被災地住民に大きな希望を与えたことは間違いないでしょう。

4. この災害の特徴

伊勢湾台風は潮岬付近へ上陸し、奈良・三重県境を時速60キロで北上しました。吉野、宇陀両川の水源である大台ヶ原は日本一の多雨地域で、これまで日に1,000ミリを越す雨量でも下流域に大きな被害を出すことはそうありませんでした。しかし台風通過時の26日から27日の観測で640ミリと予想よりも少なかったにもかかわらず、下流域に未曾有の被害をもたらしました。

その理由の一つは台風襲来前より断続的に降った雨にあります。山肌や地表が水浸しになったところに台風の豪雨が重なり、大台ヶ原から川を流れてくる大量の水に加え、雨が地表に染み込まず川へ流れ込んだことが急な増水の原因になったと考えられます。これには普通の台風が上陸前後に勢力が弱まるのが一般的なのに、伊勢湾台風はほとんど勢いを保ったまま県をかすめていったことも大きく影響したと考えられます。このことは、気象状況によっては様々な条件が重なり、人間の想像をはるかに超えた規模の災害に発展することを、私たちに教えてくれています。